

平成 29 年度第 2 回 立川市文化振興推進委員会 会議録（要旨）

開催日時	平成 30 年 2 月 15 日（金曜日） 午後 5 時～7 時
開催場所	立川市役所 209 会議室
次第	<ol style="list-style-type: none"> 1. 開会 2. 立川市の主な文化振興の取組 3. 意見交換 4. その他
配布資料	<ul style="list-style-type: none"> ・平成 29 年度 立川市の主な文化振興の取組 ・文化振興推進委員会テーマについて ・「創造拠点の 12 年」にしずがも創造舎 2004～2016 より ・「若手アーティストの支援～大学における若手アーティスト支援」を中心に ・平成 29 年度第 1 回立川市文化振興推進委員会会議録（要旨）
出席者	<p>[委員]（敬称略）</p> <p>今井良朗（委員長）、酒井美恵子（副委員長）、伊東功、高木誠、中込遊里、蓮池奈緒子、堀江けんいち、槇島藍、宮田龍之介、綿引康司</p> <p>[事務局]</p> <p>渡辺晶彦（産業文化スポーツ部長）、岡本珠緒（地域文化課長）、渡辺昌明（地域文化振興財団事務局長）、柳澤彰子（文化振興係長）、足立香織（文化事業係長）、二ノ宮真輝（文化振興係）</p>
公開及び非公開	公開
会議結果	<ul style="list-style-type: none"> ・「活動の場・発表の場・交流の場の創出」と「若手アーティストの支援」について、意見交換を行った。
担当	<p>産業文化スポーツ部地域文化課文化振興係</p> <p>電話 042 - 506 - 0012</p>

1. 開会

- ・委員長の司会により開会
- ・事務局より、資料について確認があった。

2. 計画の進捗状況報告

- ・事務局より、第三次文化振興計画の進捗状況について資料の説明があった。
(委員長) 資料の説明にあった「西地下道壁面アート化計画」について、大変期待している。

3. 意見交換

- ・「活動の場・発表の場・交流の場の創出」と「若手アーティストの支援」について、意見交換を行った。

[意見交換]

(委員長) 前はA委員とB委員がご欠席なので、お話を伺いたい。

(A委員) 現在、豊島区の財団にて勤務しており「あうるすぽっと」の運営を中心に活動しているが、前職で「にしすがも創造舎」と「たちかわ創造舎」に関わっていたため、その事例を報告する。

「にしすがも創造舎」は豊島区の廃校を活用した施設。体育館を専用の劇場にすることで演劇・ダンスの団体に発表の場と稽古場を提供した。比較的安価で、かつ最大2カ月間の長期間利用を認めたことで年間利用の6～7割が稽古場として活用され、舞台芸術の国際的フェスティバルである「フェスティバル/トーキョー」の会場にもなった。区と二つのNPOによる共同事業であり、行政の金銭的支援を施設維持管理分の数百万円のみとし、事業収入、助成金収入等で運営され、企業協賛もあった。2004年から2016年までの12年間で約3億円、年間では約3,000万円の売り上げがあった。

自主事業を実施しながら、地域にも施設を開放する機会を設けることで地域との交流を生み出すとともに、アーティスト同士の交流も多く生まれたという実感がある。

(副委員長) とても良い施設だと思うが、閉じてしまった理由は？

(A委員) 区と教育委員会との判断で学校（建替え用仮校舎）に戻った。NPOとしても区の所管課にも続けたいという思いがあったが、教育施設に戻ることだったので理解した。何かを閉じて、また新たなことが次々と生まれてくるのが大事だとも思う。

(委員長) 先進事例として、立川市にとっても非常に参考になるのでは。他に質問のある方は。

(C委員) 12年間で26万人という利用者数の多さに驚いた。主に学生に貸し出していたのか。

(A委員) 学生よりプロとして活動している劇団が多い。実際に公演が決まっているところにその稽古場所として貸し出していた。体育館の稽古場は、規模が大きく稽古に参加する俳優の人数が多い劇団が月単位で借りていたことが利用者数の多さに繋がった。

- (D委員) 利用料は事業の採算がとれるように定めたのか。
- (A委員) 都内の類似稽古場の利用料を調べた上で、設備の不足を鑑みて、廉価に抑えた。その上で稽古場利用を団体に促した。
- (事務局) 施設の改修費用について、区との住み分けは？
- (A委員) 人命に関わるような改修については区、それ以外は基本的にNPOが対応した。都内での廃校活用の事例が少なかったこともあり、区とは適宜相談をしながら進めていた。
- (委員長) 「にしすがも創造舎」での失敗例があれば伺いたい。
- (A委員) NPOが自治体と対等な立場で事業を進めていく上での困難さがあった。都内での廃校活用の事例が少なく、学校施設の特殊性が故に失敗することもあった。一方で委託でも補助でもほぼ無かったために自由度が高く、イニシアティブを持って事業が進められた点は、NPOにとって有意義だった。
- (委員長) 廃校活用は困難だ。それぞれの主体が各々の違いをよく認識する必要がある。
- (A委員) 地域との交流、地域から理解を得ることには非常に腐心した。
- (E委員) (旧多摩川小学校のA棟である)たちかわ創造舎には元教室の部屋や元職員室の部屋はあるものの、にしすがも創造舎のような演劇用の広い屋内空間が無い。(旧多摩川小学校のB棟である)たまがわ・みらいパークのどれみホール(元音楽室)が広さとしては使いやすいが、たまがわみらいパークは地域に開かれた施設であるため、演劇団体が優先的に使用することは難しい。
- (A委員) にしすがも創造舎は設立の経過から、区民活動、地域活動がほとんどない状態からスタートした。一つの施設の中にプロの劇団の利用と、地域や区民の利用が混在することの難しさはある。
- (委員長) 続いてB委員から「石田倉庫」について伺いたい。
- (B委員) 石田倉庫は倉庫業を営みながら空きスペースをアーティストの制作の現場として貸し出している。入居者は現在約20名で、金属や造形、彫刻、絵画などのアーティストがアトリエを構えている。年に一回、オープンアトリエのイベントである「石田倉庫のアートな2日間」を実施している。最近は富士見町地域の団体である「アートインファーム」「たちかわ創造舎」と連携して、お互いのイベントをPRする目的で「富士見町あーととれいる」を実施している。まだ実現していないが、「石田倉庫のアートな2日間」に他の団体や、富士見町地域の市民が参加することも検討したい。
- (委員長) 石田倉庫のアトリエを借りる人は減っているのか。
- (B委員) 現在は空きも多い。少子高齢化なのかもしれないが、私がアトリエに入った当時は入居者が多く、空きが無いような状態だった。
- (委員長) 他に同じような施設が出来た、ということか。
- (B委員) それもあると思う。
- (D委員) 入居者の年齢層はどうか。
- (B委員) 上は60代、下は20代で中間層が少ない。若い人は一度石田倉庫を借りても別の場所に移る人が多い。また自宅で製作可能な作品をつくる人が多くなった印象が

ある。

(副委員長) 都内にある貸出しアトリエとして一番有名なのはどこか

(B委員) 貸出しアトリエはそこまで多くないが「アーツ千代田3331」は有名。利用する側にとってはスタジオ兼美術館のほうが使用しやすい。また最近に住居兼アトリエとして借りることが出来る物件もある。

(A委員) 「石田倉庫」のアトリエとしての活動を全体的にマネージメントする人は？

(B委員) いない。アートな二日間のイベント時に集まるのみ。アトリエ自体を運営していく指針がない。

(委員長) 制作の場と住居の距離の問題がある。若い人にとってもアトリエの近くに住むことが出来れば移動時間の制約が無くなるため、創作活動がよりし易くなり、望ましい。立川市子ども未来センターは、時間が自由に使える施設ではないので、製作する側にとっては使いづらい。

(委員長) 続いて副委員長から若手アーティストの支援についてお話を伺いたい。

・副委員長より資料4についての説明、配布されたパンフレット等資料について説明がなされた。

(委員長) 武蔵野美術大学では、学生に対する支援はあるが、卒業したばかりの若いアーティストをどうやって育てていくのかに対して学校がうまく面倒を見切れていない。大学が真剣に考えるべき課題だが、社会全体でも考える必要がある。展覧会、個展などは特に費用が掛かる。

また、版画などはプレス機が無いと作品をつくれな。自宅におけるようなものではないので、大学が設備を開放すべきでは、と思う。大学、行政、企業、さまざまな繋がりの中で、どのような支援が出来るのかを模索すべき。音楽以上に美術は難しいと感じる。

(D委員) たましん美術館ではギャラリーを借りる人が高齢化しているため、様々なところに声をかけている。若い作家は発表の機会がほしいのか、経済的な支援がほしいのか見えてこない。たましんはかつてアーティストの経済的な支援をしてきたが、いまは以前より難しくなってきた。損保ジャパンのように芸術家の支援をしているところもあるが、一握りの受賞者は良いが、その他大勢の人の支援はどうすべきか。

(委員長) 若い人にとっては発表、創作の場、金銭面すべて揃うのが最も望ましいが、まずは発表の場で、次に創作の場。金銭面はある程度解消されることもある。

(F委員) 日本では画廊が作家に場所を貸し出すことが多いが、NYでは画廊が若手作家の作品を買い取って販売することが多く、そのために様々な努力をしている。現在日本で活躍しているアーティストでも日本では売れないので海外へ出ている。日本には力のあるプロモーターが少ない。芸術家は自身で売ることが出来ないため、売ってくれる人が必要。NYでは芸術家にとって生活しやすい社会が整っている。アルバイトをしながら芸術活動をするのも良いのかもしれないが顧客や観客の反応が見えないから自己満足になることもあり、どこかで甘えが生じることもある。海外の公共施設でバレエの公演をする際、スタッフがついているのでプランナーさえいれば公演が出来る。行政は文化芸術分野にもっと本腰を入れて支援すべきでは。行政が介入し、広い倉庫や空き家などを稽古場や創作の場として貸し出すことで結

果としてその地域の地価があがるという事例もある。

(委員長) なかなか難しい問題。行政だけでは無理で、大学や市民団体だけでも無理。連携してやっていく必要がある。行政の役割は、それぞれの主体の役割を明確にする旗振り役。

恐らく次回の話題になるかと思うが子ども、中堅世代、高齢者様々な年齢層が「子どもの未来をちゃんとつくっていく」という目的の元に協力できる環境を整えていくことが結果としてアーティストにとっても望ましい。

(G委員) 身近なところだが、発表してくれる人がほしいと思っている人、施設もある。例えば地域の学習館。地域の方にもっと音楽や芸術を楽しんで頂く、学生は発表の場にするといった関係性を作っていきたい。

(C委員) 武蔵野美術大学の卒業生が知り合いの会社において、広報を担当している。広報に関する作業が一通り全て出来るので、おかげで会社のブランディングが良くなった。大学生が在学中に多摩地域の企業にインターンシップをして、お互いの条件が合えばそのまま採用、というような制度があると良いと思う。創作活動に理解のある企業も多いと思う。

発表の場として、面白いと感じるのは神社仏閣。最近は開かれたところも多い。アメリカからの留学生が描いた水墨画をお寺で展示・販売したところ非常に売れ行きが好調だったと聞く。

(委員長) 奈良の禅寺である「元興寺」にて写真展が行われると聞いた。創意工夫によって発表の場を見出す必要があると感じる。

(B委員) 東京には発表の場が少ない。たましん美術館は発表の場だが販売が出来ない。

(D委員) 金融機関なので絵画を、販売することが出来なかった。その分作家に金銭的な支援を行ってきた。現在、ルールの変更を検討している。

(B委員) 民間のギャラリーと同じようであれば作家もお客さんも見る目が変わってくる。

(F委員) 作品との出会いの場を提供することは大事。ヨーロッパではショッピングモールなどに地域の芸術家のための商品展示コーナーがある。

(委員長) 音楽以上に「美術はこういうものだ」という認識が根深い。様々な形での広がりが必要。

(事務局) 先ほど副委員長からお話のあった、視覚障害のある学生による、暗闇演奏会を是非やってみたい。費用は無料でも考えたい。

(副委員長) 投げ銭方式でも良いかもしれない。

(委員長) 多摩フレッシュ音楽コンサートの紹介をしてください。

(事務局) 多摩フレッシュ音楽コンサートは、学生を支援する名目ではじまった。1993年に行われた東京都への多摩地域移管100周年イベントのレガシーと言える。

・多摩フレッシュ音楽コンサートについて、資料の説明。

音楽だとこういうことが出来るが、アートだと難しいかもしれない。

(委員長) 音楽、美術など様々なアートをつなげる、横の繋がりと面白い。

(H委員) 私も同じことを考えている。音楽の生演奏に併せて演劇を行いたい、劇伴を受けてくれる演奏家は少ない。また美術も大事にしているので現代美術に取り組んでいるアーティストと共に仕事をしているがそれにも苦勞が多い。お互いに相手の仕事

を勉強しながらやっている。

若手アーティストの支援といった意味で、経済的な部分は非常に大変で重要なことだが、自分の作品の質が上がれば後から付いてくるのではと思えば頑張れる。

一番重要なのは人。志のある仲間がいれば、どうにかなるのではないかと思う。様々なアーティストと繋がりたい。人を探すのが難しい

(委員長) そういった場を立川市地域文化振興財団が作ってくれれば。

(F委員) ヨーロッパではプロモーターというか、芸術家同士を繋ぐことで生計を立てている人がいる。

(委員長) そういった人材を育てること、教育する場をつくることもまた、重要だと感じる。前回の会議でも話をしたが、若い人がそれぞれを評価しあう場が必要なのではと思う。例えば立川文化芸術のまちづくり協議会の補助金審査を若い人が行っても良いのでは。

4. その他

- ・副委員長のあいさつにより閉会。